

村田喜代子「鍋の中」考

A Study on “Nabe no Naka (In a Pot)”

宇野憲治

Kenji UNO

In Japan, Akutagawa Prize is a coveted literary prize awarded semiannually to a budding writer who exhibited the greatest promise for his or her professional future during the preceding half year.

Kiyoko Murata won the 97th Akutagawa Prize for the first half of 1987 for her work, Nabe no Naka (In a Pot). What she wanted to accomplish in this work is a depiction of the contents of a pot of hodgepodge. This hodgepodge is also the real world. This observation is done through the eyes of the grandchildren who spent their summer at their grandmother's house in the countryside. They came to feel uneasy concerning their own existence through their experiencing reliability and unreliability of their grandmother's memory. In my article, I attempted an approach to the essential problems of human existence like the problems of the blood-ties, issues of heredity, and matters of life and death through the analysis of the children's anxiety.

はじめに

村田喜代子「鍋の中」は昭和六十二年（一九八七年）上半期、第九七回芥川賞を受賞した。この作品は当時評判になり、黒澤明は平成三年（一九九一年）この原作に基づいて、映画「八月の狂詩曲」ラヴソングを作製した。しかし、原作と映画とはかなり主題が異っている。原作「鍋の中」では人生その

ものの不可解さが描き出されているのに対し、映画「八月の狂詩曲」ラヴソングでは、長崎の原爆が前面に出されている。また、登場人物は、原作では、四人の孫たちとおばあさんだけであるにもかかわらず、黒澤は、四人の孫たちとおばあさんに加えて、ハワイから帰った家族・ハワイから訪ねて来る錫二郎の息子クラークを登場させている。そして、このような設定の中で子供たちの見る原爆、親たちの世代の見る原爆、それから外国人二世のクラー

クの見原爆という三重層の原爆を描いているのである。映画は原作によっているにも関わらず、全く別の作品と思うくらい主題を異にしている。

映画「八月の狂詩曲」^{ラプソデー}との比較検討は別稿に譲るとして、この論考では、村田喜代子「鍋の中」を見ていくことにする。

一 選評

芥川賞の選定は、この当時（昭和六二年）どのような状況であったのであろうか。ちょうどこの年、河野多恵子と大庭みな子という二人の女性が初めて選者として入った年である。また今回以前の第九五回・第九六回は芥川賞の受賞者がおらず、二年ぶりの受賞として注目されたのである。この受賞より前の十回分の芥川賞受賞者を見ると、男性三人（尾辻克彦・唐十郎・笠原淳）に対して、女性が七人（重兼芳子・森禮子・吉行理恵・加藤幸子・高樹のぶ子・木崎さと子・米谷ふみ子）である。女性の受賞者が大幅に増えて来たわけである。二人の女性選者の登場も、こんな時代背景があるからこそなのであろう。

まず、河野多恵子であるが、

結局、私は「鍋の中」一作の受賞を支持した。米谷ふみ子・山田詠美氏の出現には、女性新人の歴然とした変化が認められた。現実との強い対決が作品の基盤となっているのが、大きな特色である。村田喜代子氏のこの受賞作もまたそうである。そうして、男女の別なく、この傾向は今後の新人たちにおいて、一層強まるのではないかと思う。

また、大庭みな子は、

村田さんの「鍋の中」には不可解な奥行きがある。妙なおかしみの

ある味わいが、よいふうににじみ出ている。読者は考える前に、おばあさんの大きな鍋の中に浮き沈みするものにひきつけられてしまう。

覗き込むと、次から次へいろいろなもの下の方から頭をもたげ、漂い、流れ、見えなくなると思うと、また思わぬ方にあらわれる。

とある。

この時は、日野啓三が審査員を中心であったが、その日野啓三は、

「鍋の中」とはいささか地味すぎるイメージだが、それはこの世界と人間の意識の全体の象徴と読んだ。

そういうよき抽象的認識が、話の運びの計算されたしなやかさ、文章のとほけたようなユーモアと共にあることに感心した。快く楽しく読めて、そしてこの世界と意識の不確定さに不気味になる。だがその「宙ぶらりん」さを結論としてではなく、出発点として、生きてゆくうとする軽やかなしたたかさが流れている。

と述べ讃辞を送っている。

考えてみるに、我々は日常生活において、種々ものを忘れてたり、非常に詳しく覚えていた部分と非常に曖昧にしか覚えていない部分とがあったり、非常に断片化していたり、シロツキングな事件だけは覚えていたがその実態を忘れてしまったり、極端になると、兄弟までも忘れてたり、と言うことが起こってくる。記憶というものは、年齢と共に次第に衰えてくるが、あるシロツキングな事件によって、過去を全部忘れてしまうことさえもある。また蜘蛛膜下出血とか、脳の一部の欠損によって一部の記憶がなくなってしまうとか、あるいは運動ができなくなるとかということが起こってくる。このような微妙な記憶とか意識等が、「鍋の中」では大変重要な問題

となっている。この村田喜代子の「鍋の中」にはそういう忘れかけている意識、あるいは忘れかけている現実、こういうものを統合しようとする老婆の営みが見られる。孫と接することによって、意識が呼び覚まされてくるのである。

次に黒井千次の選評である。氏は次のように述べている。

ハワイに祖父の弟が見つかったとの手紙が届き、親たちが会いに出かけたために四人の孫が一夏を祖母のもとに預けられる。老人と十代の孫たちの田舎の暮しを描いた小説なのだが、面白いのは大人の男女が一人も登場して来ない点である。記憶のあやふやになったかと思われる老婆と、彼女の話すことによって出生の秘密をあばかれたように感じる孫達の、どこまでが本当でどこからが嘘か判然としない世界が、大人抜ききの鍋の中で煮立てられていく。

とある。この一文からは、黒井千次の「鍋の中」に対する深く鋭い読みがよく見て取れる。

それまでは何の疑問も抱いていないことが、すこし疑問を抱くことによつて熱を持ち、そこに心の葛藤が始まる。現実離れしているようでそうではなく、ちよつとした一言、一動作から、今の世の中の矛盾や虚偽を覗いてしまう。そんな柔らかな心をもった作品であるといえる。

二 クラークからの手紙

まず作品の展開に大きく関与しているのが、クラークから来る三通の手紙である。手紙はそれぞれ、冒頭部分、中間部分、末尾部分の三箇所配置されている。それに答えるかのように、こちらからも返事を出すのであ

る。短いで引用しておく。

『拝啓

花山苗様

私はあなたの弟である春野錫二郎の息子です

父は一九二〇年に日本からハワイに大きなゆめといっしょにきました彼はパイナップルといっしょに生きましたそして大きな農園を私にゆずりもうすぐ死ぬでしょう家出人は最後にあなたにいたがっていますすぎて父にあつてくださいます敬具 クラーク』

とある。この手紙をもらつた苗の子供たち、即ち縦男・みな子・わたし(たみ)・信次郎の両親たちは、苗に代わつてハワイへと旅立つて行く。そして子供たち(苗からすれば四人の孫たち)が苗の家にやってくるのである。そのような意味で、この一通の手紙は作品展開の上で、重要な意味を持たされている。

二通目の手紙は、ハワイに行った両親たちの消息を知らせる手紙に同封されていたクラークの手紙である。

『拝啓

我々の日本の叔母さん

あなたの子をたくさんよこして下さつて有がとうございます父はたいへん良くなりました毎日あなたのことを話していますあなたのことを彼らにたずねています父のためにあと少々彼らを引き止めますお元気で敬具 クラークより』

といった手紙である。ハワイへ行ってみたい孫たち四人は、祖母(苗)を説得して、是非とも一緒にハワイに行こうと勧める。錫二郎を忘れている

苗にとつては、ハワイへ会いに行くよりも、孫たちという方が数倍幸せなのである。孫たちの思惑と苗の思いとが一致しない。が、とりあえず返事ということもあつて、縦男が、祖母の代筆を務める。祖母の口述筆記であるから、なんとも古風な言葉遣いである。

「その後、貴方様の御身体はいかがですか、お尋ね致します。一日も早くすみやかに御本復なされますよう、神仏に日夜御祈念申し上げます。過ております。お蔭をもちまして……さて、御願いを申し上げます。過ぎ去りし年月幾星霜、年稚き姉弟も歳月の流れを経ましたる今日、あらかたの記憶もまぼろしの如く消え失せ……春野錫二郎様御もとへ」といった文面である。「御本復」「日夜御祈念」「幾星霜」等、漢語を使用した、もつてまわつた言いまわしである。それに比べて、クラークの文章というのは素朴である。子供たちの両親が向こうにいれば読んで聞かせるであろうが、錫二郎は寝たきりであり、あまり字が読めないはずである。またクラークはハワイで生まれた子であるため、当然漢字は読めない。そういうことで、次のような手紙がもう一度来る。

『花山苗様』

お手紙有がとうございます父もわたしもよみました。しかし字がわかりませんして文しようがわかりません。

父は大変よろこびました有がとうございます。病氣は早く良くなるでしょうお手紙を下下さい。みなでよろこんでよむでしょう。ではごへんじまで。さようなら

クラーク』

これではどうしようもない。おばあさんに見せても仕様がないというので、縦男たちは勝手に返事を書く。五分間で書き終えたという縦男の手紙はこ

んな文章である。

『クラーク様』

お手紙ありがとうございます。みなで喜んでよみました。私も好きです。錫二郎さんも早く良くなって下さい。弟のかおをみたいです。しゃしんを二まいほどおくってください。まっています。さようなら。

花山苗』

この返事は、孫たちが祖母に黙って書いた手紙である。手紙の内容はともかくとして、こうした一連の手紙が本文中に差し挟まれていることにより、自家中毒に陥りやすい祖母と孫たちとの会話が弾んでくるのである。外的刺激があることにより、内向的・閉鎖的会話は一時中断され、新鮮な風が入ってくる。これら一連の手紙の配置は、そこから新しい話題へと発展させる巧みな展開方法である。その展開に伴いながら、祖母の記憶の確かさ・不確かさが云々されることとなるのである。祖母は甥にあたるクラークとのやりとりを通してながら、弟であるはずの錫二郎を思い出そうとするが、どうしても思いだせないのである。

おばあさんは、意外にしっかりと十二人の名前をあげた。

「菱太郎、鉦二郎、衝一郎、鉄郎、衝介、穿二、軸郎」

それを縦男が、いち、に、さん、し、と数える。

「おばあさん、凄いや」

縦男はうなつた。

「銀郎、鏝郎、積介、…… いままで何人？」

「十人です。あとおばあさんとふたりだけです」

「するともうふたりは女の子だから、わたしと妹のお麦」

「すばらしい」

と縦男がうめく。

とある。孫たちも、祖母がこれだけ正確に覚えていたのだから、覚えていないはずはないと思うのだが、錫二郎だけはどうしても浮かんでこない。全部で十二人、孫たちは「じゃあ、おばあさんは十三人兄弟だ」とこう決めている訳だが、十二人しか正確には思い出すことが出来ないのである。クラークの手紙という外的な刺激で始まった一つの事件を通してながら、また手紙のやり取りを通してながら浮かび上がってくるのが、祖母の兄弟姉妹の問題である。兄弟の十二人の名は正確に言えるにもかかわらず、あと一人、錫二郎だけを全く忘れ去っている祖母に何が起こっているのか。そして祖母の兄弟に関して、銀郎・軸郎・麦にまつわる話に及んだとき、遺伝という、一族に関わる内なる問題が、またそれに対する孫たちの不安が浮き彫りにされてくるのである。

三 記憶の不確かさとメンデルのエンドウ豆

縦男はしきりに音の飛んだオルガンを弾いている。最初は片手でぎこちないが、最後のあたりでは両手で弾けるようになっていく。オルガンそのものに馴れた結果であろう。しかし、なんといっても欠陥オルガンの音楽である。

薄暗い座敷から響いてくる古いオルガンの音色だった。おばあさんが昔小学校に勤めていたときに使っていたオルガンだ。湿気で傷んでしまっていくつかの音が出なくなっていた。だからいまひいている曲は『のばら』なのだが、あいだでぼつぼつと音の欠ける、穴あきの『の

ばら』だった。

オルガンをひいているのは、いとこの縦男だ。

とある。欠陥オルガンをひく縦男の姿とオルガンの音は、本文中に何度も繰り返し出てくる。いわばこの作品の通奏低音ともなり、祖母の記憶の不確かさとも重なって大変象徴的であるといつてよい。音の飛んだオルガンは祖母の記憶の不確かさである。縦男が両手でオルガンを弾けるようになったということは、最初は、不安であった祖母の記憶のあり方に孫たちも多少馴れてきたという暗示であろう。

また、縦男は何度もメンデルの遺伝の法則を持ち出してくる。これも主題に関わる象徴的かつ暗示的な表現である。

「ばかだな。メンデルのエンドウ豆の交配を知らんのか」

そして縦男はそよそよと風の流れる花桐の木の下で、エンドウの紫花は優性で雑種第二代では紫花と白花が分離しRが紫花の遺伝子でrは白花の遺伝子なのだが……、

などと寝たまままで講義をはじめたのだ。

とある。他にも何度かこのエンドウ豆がでてくる。

☆ わたしは縦男のいったメンデルのエンドウ豆の紫花と白花のことをおもいだした。そして軸郎の紫花がわたし達の上に回ってこなかった幸運をおもった。

☆ 凄い事実だ。凄いエンドウ豆のドラマだ！

☆ エンドウ豆のロマンの最後は怖ろしい結果になったのである。

☆ わたしの眼の前には、ひと粒のエンドウ豆から生まれた次のエンドウ豆のそのまた次の孫エンドウ豆が、ぼうーっと畳に倒れて言葉

も出ないようすだったのである。

☆ わたし達はそんなにも青い一粒のエンドウ豆……、縦男のいう悲しいエンドウ豆のロマンにあこがれていたのである。

☆ 台所の流し台の前にむこうむきに並んだエプロンの三つの縦結びの景観……、つまり祖母と娘と孫の縦結びは、いつか縦男がいったエンドウ豆の交配の結果としかおもえなかつたのである。

けれど、そのエンドウ豆はおばあさんの話によって、みごとにうち砕かれてしまった。エンドウ豆は交配しなかつた……。

とある。縦男の弾くオルガンといい、縦男の話すエンドウ豆の話といい、この作品の縦糸・横糸になり、人間の記憶とは何か、遺伝とは何かという人間存在の根本に関わる問題を暗示的に読者に提示しているのである。

※

四人の孫たち（縦男・みな子・たみ・信次郎）は、両親に対して、先祖に対して、何の疑問も抱かず祖母のいる田舎へ遊びに来たのである。もちろん両親たちはクラークからの一通の手紙によって、休暇をとりハワイに行っている。祖母と孫たちとの至福の時間が、祖母の田舎で展開される。しかし、祖母が思い出そうとして思い出せない錫二郎のことから、次第に話は転換し、それぞれの身の上話となってくる。何気なく言う祖母の一言一言は大変な重みを持ち、出生について何の疑問も持っていなかつた孫たちに不安を抱かせることになる。

まず、信次郎について見てゆく。

縦男とおばあさんの腕のあいだから、よろよろと立ちあがって出て来た信次郎は、わたしたちが誰もみたことのないおかしな男の子にな

っていた。色のはげた木綿の着物は彼のひざの半分しか丈がないのだった。……（中略）……

「まあまあなんと、軸郎に似ていることだろう！」

そして信次郎は彼女の前で、ひとまわり歩かされた。……（中略）……そうやっておばあさんは、わたしたちにひとりの少年の話をはじめたのである。軸郎は中学校に入る前に気が違って、格子のはまった部屋に入れられていたのだという。おばあさんはハワイでいまごろたぶん死にかかっている錫二郎さんの何倍もの情熱でその少年のことをしやべった。

とある。パジャマを着た信次郎の姿は、気がふれた軸郎に似ているという。その祖母の一言が、信次郎を不安にさせたのである。そしてその軸郎は、座敷牢の中で「紙にいろいろな字を書いていたの」だと言う。「眼、耳、口、鼻……、それから……頭、首、胸、腹、背、尻、足……、髪、爪、骨……」等といった文字である。何とも奇妙な身内である。「縦男もみな子も沈黙し、信次郎はじぶんの首のあたりをぼりぼりとかく」のである。軸郎に似ていると言われた信次郎自身、人知れず心の中に大変な不安を抱くこととなるのである。そして、ひとりでは夜寝られなくなる。

※

次に縦男である。縦男は以前、たみ（わたし）に、次のように言っている。

「うちの親父はね、あのおばあさんの子供でなくて、どうもおばあさんの下から二番目くらいの弟の子供だったらしいんだ」

縦男はなぜかそのときは、うれしそうにいった。

「家系伝説という言葉をたみ子は知っているか。ぼくはそれを聞いたときぞくぞくしてきたな。いったい親爺の親爺というのはどんな人間だったんだろう」

と、この時の縦男の発言は、自分とは直接関わりのない話として、だが何かミステリーを含んだ好奇心を含んだ話として、第三者的発言なのである。だが、祖母に聞いた何気ない話と祖母の一言が、自分自身の事として結び付いた時、笑うに笑えない現実を突きつけられることになる。次の祖母の一言は縦男に大きな衝撃を与えるのである。

「天罰がくだるといふのか、このあともう十何年もたったある日、こんどは鉄郎が親方になって若い弟子を家に入れていたんだけど、その男が悪いやつでお金を盗んで逃げようとしたのよ。鉄郎がみつけてふたりは格闘になったのね。そうして鉄郎は弟子のふりあげた金鎚に打たれて死んでしまった」……(中略)……

そして、親方のおかみさんから鉄郎の奥さんになったその人も、このあとすぐに病氣になって死んでしまうのだった。あとには、ひと粒の小さなエンドウ豆が残された。

ふたりのあいだに生まれた男の子である。

「その赤ん坊をじぶんの子供にして育てたのが、鉄郎の弟の積介なんだよ、積介には子供がいなかったのね」

という箇所である。他人事のように思っていた事件が、直接自分と関わりがあり、自分の血の中の流れている先祖への思いと一つとなった時、その事件を深刻に受け止めざるを得なくなってしまうのである。縦男の父が鉄郎の子だとすると、縦男にとっては恐ろしい現実である。

鉄郎は祖母の七番目の弟である。普通、坊さんになるとか先生になるとかするのだが、この鉄郎だけは何を思ったのか靴の職人になりたいと言い出し、親が反対したにもかかわらず靴職人になる。そして、五年間の年期が明けると言うその寸前、その靴屋の女将さんと手をとって駆け落ちしたという。恩人を裏切り、逃げて行くときに、実家へ帰ってもすぐ追かけてくるだろうということでも山に入った。山に入ると杉の木があつて、そこに雷が落ちていて、その姿を見て、親方の奥さんは、木が情死していると言った訳である。その情死したと言われている杉の木を縦男とわたしが訪ねて行くのである。

縦男にとつては、自分の祖父母が見たかもしれない杉の木なのだ。その木を見ながら、縦男は笑うのであるが、わたし(たみ)から見れば、「低い縦男の声でないような笑い声だった」と思えるのである。そして、共に訪れたわたしには、「静かさがわたしの胸に、死んでしまった人達の姿を濃くよみがえらせる」ように思えるのである。「二本で一緒に枯れ」た杉は、目に見える形で、一層重い現実を、縦男に突きつけてくることになる。

外からながめるとたいしてかわらない縦男の、けれども心の中になにか変化しかけるものが起つたのは事実のようである。彼はおぼあさんの話によって知った本当の自分のお爺さんの不幸を、しみじみとかんがえているのかもしれない。

とたみの目で見えた縦男の内心を描写している。

※

わたし(たみ)とて例外ではない。風呂の中でお祖母と話している時、祖母は急に泣き出し、次のように言うのである。

「麦子、あたしの妹の娘なの」

そういえばおばあさんの妹の名前はお麦なのだった。お麦さんの子供が麦子なのだろう。

「麦子はお前を生んですぐに死んでしまったのよ」

おばあさんは、またひとしきり泣くのである。

「ちょうどあたしのところでは渉助がすみ子さんと結婚していたからね、もう赤ん坊のためにこれしか道はないと話し合って渉助夫婦にもらってもらうことにしたのよ」

渉助とは、いまのわたしの父である。

とある。たみにとってはショックな話である。祖母の何気なく言った一言は、たみにとっては耐え難い現実そのものへの認識となる。容赦のない苦い現実をまざまざと見せつけられる。

世の中には、なんと不幸な人間がいるのだろうか、わたしは本当の母の麦子のことをかんがえた。すると嘘みたいな涙がぼろりとひとしずつ流れ落ちた。結婚してじぶんの子供の顔もみないうちに死んだ男がいる。……するとまたひとつ、涙が落ちた。

そして、せつかく生まれてきたのに、父も母もいなくなった赤ん坊。するとまたひとつ、涙が落ちたのだ。ああ、その不幸な赤ん坊がわたしなのだ。

なんと嘘みたいな本当の話だろう。泣きながらわたしはそのことに深く感動したのだ。

事実とは……、とわたしはタオルで涙に濡れた顔をふきながらおもった。

事実らしくなくても、……やっぱり事実なのである、と。

それからあとの日々を、わたしは深い憂愁の中で送った。祖母にとっては、風呂の中で急に思い出した話をしたまでのことかもしれないが、それを聞いたたみにとっては青天の霹靂で、まさに極楽から地獄へ突き落とされた感がある。もしこのことが事実であるとするならば、たみにとっては本当に重い現実となる。

信次郎・縦男・たみは、祖母の不用意な(?)一言によって、三人三様の重苦しい悩みを抱え込んでしまうこととなる。特に、縦男とたみとは深刻である。もしこのことが事実であるとするならば、現実の血の繋がりを意識せざるを得ず、自分ではどうしようもない自己自身へと向かう深刻な悩みに直面するのである。

しかし、作品を読み進めていくと、これら深刻な悩みの行方は、急に曖昧な、宙に浮いた不安へと変化していく。事の発端は、軸郎に関することからである。

信次郎がいつも行き慣れているお寺の池に祖母達と行ったときのことである。祖母は軸郎に関する妙な話をする。ある時、軸郎が寺の池にはまって、溺れそうになった。それを河童が助けてくれたという。河童が助けてくれたというその話から、軸郎の勉強好きの話になり、のちに先生になったという話になり、前に聞いた気の違った軸郎とは話が食い違ってしまうのである。

「軸郎?……」

「ほら、気が違って座敷牢みたいな所に入れられたんでしょう?」

「とんでもない」

おばあさんは不思議そうな顔をし、

「あの子は気が違ったりなんかしないよ。ちゃんと上の学校まで進んで教師になったのよ」

わたしたちは一瞬ぼかんとした。

「あの子は最後は中学の校長になって、東北の学校に赴任する途中、その汽車の中で脳溢血で倒れて亡くなったんだよ」

おばあさん、嘘ついてるよ！ と信次郎が大きな声で言う。

「気が違って死んだと言ったじゃないか。ほら、いろいろな字を書いたって」

おばあさんは首を傾げたままである。

こういうふうの話がくい違ってくるのである。軸郎のことについて一番気にしていた信次郎だけに、このように話す祖母に対して、記憶の不確かさを強くがめる。「じゃ、気が違った子は誰なんだ？」、信次郎は大声で問い返すのである。気にしてただけに、祖母の話の食い違いが許せないのである。このことにより、不用意な祖母の発言により傷ついていた二人も、不安ながらも何とか気持ちを持ち直す結果となる。

その昼、わたしと縦男は別々にではあるが、共通の疑問を抱いて、池から帰ってきた。わたしと縦男がその夕方までかかって疑問から得たこたえは、おなじものだった。それは、『おばあさんの記憶はでたらめである』という結論だ。

とある。しかし、そのような結論を得たとしても、一端気ざした自分の血縁、先祖への疑問・両親への疑問を全否定することはできない。事実といえば事実であろうし、嘘と言えば嘘であろう。祖母の記憶のあるところは

あまりにも正確であるし、あるところは本当にでたらめである。孫たちは、『おばあさんの記憶はでたらめである』という結論に達しながらも、根本のところでは「宙ぶらりん」の不安定な精神状態であり、実のところ、真実か嘘かは誰にも解らないのである。「おばあさん嘘言つたらあ」、こう言うことが、せめてもの救いであるし、不安の解消でもある。祖母に本当のことを問い詰めたとしても、祖母の一言で、またひっくり返ってしまう恐れがある。人間の記憶にはそういうところがある。一言によって傷ついた、嬉しくなったり、他人にとっては何でもないことだが、自分との関係をそこに見いだすと、それが無闇と気になってくる訳である。自分の両親とか、祖父母のこととか、あるいは先祖のこととか、そういうものに対して、ひとたび疑念を抱き始めると、自分ではどうしようもない絶対的不安に陥ってしまう。事実だと思っても、先祖を辿ってみると何処かで奇妙なことが起こっているのではないかという、人間存在の不安として、現実に厳として存在しているのである。

なんて不思議なことだろう、とわたしはおもうのだった。格子のはまった座敷の軸郎がいる。そして一方にパイナップル畑の青い目の子供達がいる……たぶんいるはずだ。軸郎とハワイの子供達のあいだには年月と地図上のへだたりがあるけれど、それは本当はそんなに離れてはいないのである。あの晩「姉さん、こわいから一緒に寝ようよ」と信次郎がわたしにささやいたとき、軸郎がたしかにわたし達のすぐ横にいたのとおなじように……。

大変暗示的な箇所である。人と人とは直接目に見える形で繋がっているわけではない。しかし、繋がっていないように見えて、深いところで強く繋

がつている場合もある。血縁というのはそのようなものかも知れない。軸郎と錫二郎・軸郎と錫二郎の息子クラーク・祖母と錫二郎・祖母と錫二郎の息子クラーク、また軸郎と信次郎・信次郎とたみ・麦子とたみ・鉄郎と縦男・たみと縦男……、そう考えてくると誰であれ奇妙な思いに囚われざるを得なくなる。作者はこの点を確信をもって描写しているように思う。

「田んぼの稲穂を吹く風」と「パイナップル畑を吹く風」の本質は同じなのである。また、「死んだら西瓜も食えないよね」「だって、パイナップルも食えなくなるからね」という言葉の根底には「生きてこそ」という切なる思いがある。生あるものは、目に見ることのできない不安の中に常に繋ぎ止められている。しかし、その根底にははかりしれない真実が厳として存在している。信じてしまえば楽であるが、一端疑いだせば地獄である。忘却と覚醒、それは人間に与えられた幸と不幸である。

四 「鍋の中」の世界

「鍋の中」というのは、非常に奇妙な題名である。この題名は同時に象徴的でもある。「鍋」というのは、例えば一時間なら一時間、いろんな物を取り合わせてそれをグツグツと煮る容器であり、「中」というのはその料理に使用する具である。この作品の中には、祖母と孫たちが、何度も食事の支度をし、皆で鍋を囲むところが描出されている。

ある夏休み、錫二郎の息子クラークからの一通の手紙がきっかけで、それぞれ親が違う孫たちが集まって来て、それぞれの思いで祖母に接し、刺激をうけていく。見方を変えると、それが実は「鍋の中」のごった煮の世界かも知れない。ある一つの空間、田舎の祖母の家に集まって、一夏を過

ごすということは、言ってみれば、「鍋の中」そのものである。「田舎の祖母の家」はそれぞれの思いを取り入れた「鍋」である。縦男は、今父だと思っている人の祖父母は駆け落ちした鉄郎であるかも知れないし、自分はその人の孫ではないかと思つて憂鬱になつている。また、信次郎であるが、バジャマを着た信次郎の姿が、気がふれた軸郎に似ていると祖母から言われ、非常に気味悪がつている。また、わたし(たみ)は、「お母さんは麦子、この麦子は早く亡くなつて妹の方に赤ン坊を預けたのではないか」「その赤ン坊はわたし」と内心穏やかでない。疑つたとしてもどうしようもないが、そんな人間関係の中で、本当か嘘かは分らない現実の不安をそれぞれが抱きながら、それぞれの思いをふつふつと沸き立たせている。そんな思いを抱きながら、田舎の家で祖母と過ごす一カ月間の生活、それはとりもなおさず、「鍋の中」そのものなのである。記憶とか、意識とかいうのは、現実の世界なのかそうでないのか、疑えば疑つたで不安になるし、信じようとするれば信じようとする事によつて、信じられないという「宙ぶらりん」な思いに囚われてしまう。この「宙ぶらりん」さが、記憶の確かさ不確かさが捻れ合いながら作品の根底を流れている。実はこれが人間の存在の不安にも繋がつている訳である。信じられるというのは、ある点で幸福なことであるが、この信に疑念を抱き不安を突き詰めていくことによつて地獄に陥る。それによつて人間存在そのものが意識に上り、浮き彫りにされてくるのである。このような、ひとりひとりの中にある地獄を、わたしの目を通して巧みに描き出しているのが「鍋の中」である。

※

冒頭付近に、「鍋の中」の地獄を暗示させる描写がある。

なんだか鍋を覗くと、ずっと以前に小学校の修学旅行で行った温泉の熱い湯の池をおもいだしてくる。カセットデッキから鳴る音楽は、その鍋の池の上にも流れていた。

とある。別府には地獄めぐりと言うのがあるが、北九州市出身の作者の実体験からすると、地獄めぐりの地獄のイメージと重なっていたのであろう。また見方を変えれば、「カセットデッキから鳴る音楽」は「極楽」のイメージを喚起させるのかも知れない。後の箇所、「極楽」という表現が出てくるが、これは風呂の中で首だけ出して祖母とたみとが話しをする、祖母の「極楽、極楽」と言う言葉に相通するものである。風呂で、祖母の言葉を聞くことによって陥ったたみの心の地獄に対して、祖母の「極楽、極楽」と言う言葉は暗示的である。

話しは換わるが、伏線として「首」に関する描写が何箇所かある。

軸郎は気が違っていたという。座敷牢のような所に入れられて、頭とか首とか足とか、人間の身体に関係ある文字を一生懸命書いたり、首という字だけをずっと何枚も書いてそのままそこに並べていたという。事実か嘘かは別として、大変重要な点である。お風呂の中で浮かんでいる時に出てくる首とか、河童が首を出すとか、池の中で軸郎が溺れた時に首ぐらゐまでしか浸からないところとか、何箇所にも「首」が出てくる。この首と言うのは、人間にとって大変重要な部分である。いわゆる上半身で一番大切な部分で、人間の記憶とか、人間存在そのものを感じる部分である。その首が作品中では、いわば、生首のような感じで描出されているのである。遺伝ということについて一言触れておく。

「ばかだなあ、メンデルのエンドウ豆の交配を知らんのか」と縦男は皆に言っている。劣性遺伝子が出てくると障害が起ったりする。従兄弟同士の間婚とか近親者の結婚とかにそういうことがよく言われる。それをエンドウ豆に例えている。気の違った軸郎は劣性遺伝であり、駆け落ちした鉄郎は突然変異であり、早く亡くなってしまったたみの母は、早く亡くなる遺伝子を持っているのである。皆それぞれ違うように見えても根底にはメンデルの法則が働いている。遺伝子と遺伝子がどこかで奇妙に絡まり合って、人間の世界を複雑にしている。先祖や兄弟がどう関係し合っているのかまるで分からない。一族の血縁というものの根底にはメンデルの遺伝の法則が厳として存在している。少し前の時代だと、五人兄弟、十人兄弟はあたりまえで、従兄弟同士の結婚であったり、地域の中だけの結婚であったり、その家の血筋とかを探って行けば行くだけ、複雑に絡まり合っていて不可解である。

この「鍋の中」には、そういうものが一杯詰まっている。生と死という問題がこの根底にある。それが表面では地獄・極楽、そしてメンデルの遺伝の法則、それからそのメンデルの法則に則った自分の先祖・自分の両親、そういう人間の存在不安のようなものが、祖母から聞いた話を媒介として、様々な形で浮かび上がってくるのである。兄弟である錫次郎を、祖母は思い出せないと言う。非常に奇妙なことであるが、孫たちと祖母とのやりとりを通しながら、人間世界の縮図のようなものを「鍋の中」は描いているのである。作品中に描出されたエピソードは、もしかすると他人事ではないという切なる思いを呼びさます。何かそういった要素を持った作品である。

最後の方に、「おばあさんの鍋は怖ろしい」と言う箇所がある。

ふと、わたしはあることをおもいついて、みおろしている鍋を大きな池面ほどの面積に拡大してみた。

そして目を凝らしてながめたのである。すると味噌汁の洪水の中にちいさくチラチラと動くものをみつけた。畑土を溶かしこんだように黄土色の水面。そこに人の首と手が出ている。軸郎の首と手にちがいない。

とある。これは現実ではないが、じつと見ているとそんな幻想が湧いてくる。そんな錯覚に陥ってしまう。それに続いて、

トンカチトンカチと鉄郎が靴を打った金鎚の柄もみえる。ぶかりぶかりと浮いている。

麦子の髪の毛が流れている。

二本の杉の木が昏睡している。

山が沈んでいる。

田が沈んでいる。

家が、

牛馬が、

鶏が

漂っている。

塵芥のようにみおろされる。

わたしは火を止めて、フタをした。

おばあさんの鍋は怖ろしい。

茶の間のお膳に、縦男と信次郎、みな子とおばあさんの顔がそろっ

た。わたしは鍋を運んで行く。なにもしないでごはんが頂ける、とおばあさんが頭をさげた。

そして、

「極楽、極楽」

と歌うように言った。

とある。「鍋の中」に地獄を見て怖ろしがっているわたしと、「極楽、極楽」と歌う祖母という対比は暗示的である。また、風呂に入って「極楽、極楽」と言う祖母と、自分の出生の秘密らしきものを聞いてこころの地獄に墮ちるわたし、全く相似の形の場面である。また、修学旅行に行ったある温泉の地獄めぐりの池を思わせる池とこの鍋とが重なっている。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の地獄の池・極楽の池をも想起させられる。

この作品では、「わたし」の視点から、孫の視点からものを見ようとしている。遺伝の問題、呆けて行く老人の記憶の問題を。八十歳にしては呆けていないが、その記憶をどこまで信じてよいのか本当のところは誰にも分からない。「鍋の中」には、軸郎の死、麦子の死、鉄郎夫婦の死、死んだ人たちがいっぱい、ごった煮の具として入っているのである。このように、「鍋の中」には、多くの問題を抱えながら死んだ死者の霊が詰まっている。それを、祖母はすべて「極楽」と見ている。その背後には祖母の持つ信仰があるからかも知れない。孫たちにはそれが理解できないのである。

祖母は、時々ふっといなくなると、村の何人かとお経を読んでいる。

木陰から首を出してのぞくと、五、六人の老婆が集って汗まみれの

お経の真つ最中だった。

おばあさん達の顔はぼっぼと非常に上気して赤く膨らんでいる。お

経の声は高く不思議なリズムを備えている。

彼女達の合掌はわたしの耳にはこんなふう聞こえてきた。

ぎやあてい　ぎやあてい　ぎやて　ぎやて

そわ　そわ　そわ　ぎやあてい　ぎやあてい　そわ　そわ　そわか

わたしはいくども鼻の汗を手でふいた。そして人間の声ともおもえない音声の渦の中から、わたしの祖母の声をひろいだし、……それから人間でない生きもののような彼女達の皺だらけの首の中から、わたしの祖母の首を探しだした。

とある。田圃に取り囲まれた一軒家に集まり、祖母たちは一心に般若心経を唱えている。周りは田圃であるから、蛙が「ぎやあぎやあ」鳴いている。

蛙が鳴くというのは生殖のためであり、生の象徴でもある。同じ場所に、蛙と祖母と、生きていこうとする蛙と死へ向かおうとする祖母たちという、生と死が対比されたイメージがある。「鍋の中」には、二重三重に、生と死という問題が、入れ籠構造の形で描出されているのである。「鍋の中」の人間界の地獄、それを忘れさせるかのような田圃の中の一軒家で一心に唱える般若心経、この作品世界は、この世とあの世との接点であると同時に橋渡しでもある。

おわりに

最後になるが、気になる暗示的場面を何箇所かあげておく。

☆ その日の昼下がり、青い田んぼの中に揺れていた白い小さな日傘

が印象的だった。おばあさんは田んぼの道に立ってわたし達のくるのをずっと待っていたのだった。

☆ 今日もおばあさんは昼から友達の家いつもの巾着を手頭に、頭にタオルをかぶって出かけて行った。……(中略)……薄い頭のとっぺんにタオルをふたつに折り畳んでのせて、田んぼの中を歩いている姿はどきっとさせる。……(中略)……頭のタオルが田んぼの中のおばあさんの目印である。

☆ 道を曲がったとき、わたしは遠くの暗い田んぼの中に……、ほとんど夜のように暗い田んぼの中に、白いものがひらひらと動いているのを見て立ち止まった。目を凝らすと白いもの下に人間の体がある。おばあさんだ、とわたしはおもった。頭に白い手ぬぐいをかぶったおばあさんが走って帰ってくるころなのだ。

白いひらひらはけれどいつこうに近づいてこない。

という箇所である。「青い田んぼ」の中の白い「日傘」も象徴的だが、「白いタオル」を持っているところが不気味である。おばあさんは風呂に行くのではないのにタオルを持っている。これは、死出の旅路の時、死者に三角巾をするが、そのイメージがあるのではないかと思う。そして最後、田んぼの中をタオルを頭に乘せて、夕立の中を踊って行くおばあさんの描写があるが、おばあさんの心境からすれば、本当に軽やかに飛んでいるような、極楽へのイメージとして描かれている。こういう青々とした風景の中を雨に打たれながら、白い物をひらひらひらひらさせながら向こうへ向こうへ行くおばあさんの姿は、死の方向へ行く祖母の姿と重なっている。それを見た孫たちの、「これは大変だ」といって迎えに行こうとする姿とは対

照的である。

最後の箇所、遠目に見ると田んぼは洪水になっており、あたかも黄土色の池である。これは地獄なのか極楽なのか分からないが、その中をおばさんの手ぬぐいは踊りつづけている。おばあさんが死の世界に行ってしまうような錯覚に陥らせる。

もう一つ気になる場面がある。白いバラの花に登っている蟻の行列である。人があくせく働き、いろいろなことをしながら、あの白いバラの花（この白いバラの花というのは極楽の象徴であろう）の蜜のあるようなところに達していく。このようにして人生を終えて行く。それはちょうど白いタオルを振りつづけながら、また、雨に濡れながら遠くへ行くおばあさんの姿と重なっている。それを見ている孫たちは、おばあさんが遠くへ行ってしまうという不安に駆られて、助けに走りだすのである。そのような描写で終わっている。

非常に不気味な作品であることは確かである。そういう意味で、蟻の行列が白いバラの花に這って上がって行く姿は、人生に喩えてみると非常に象徴的である。「鍋の中」と「バラの花」、鍋の中は地獄・バラの花は極楽、見ようによっては対比的世界のように見えるが、生死を越えた視点からすると、全く同質のものといつてよい。

日常何気なく思っていることを、このような恐ろしい形で突き付け、さまざまな生と死の問題・血縁の問題・人間存在の問題等として提示し、考えさせてくれたのが、私にとつての村田喜代子「鍋の中」であった。

(コミュニケーション学科)

(一九九八・一〇・三〇 受理)